

海外の建築誌における記事の構成と題材からみる戦後日本建築の国際的評価の変遷

A Study on International Evaluation of Japanese Modern Architecture Through the Lens of Overseas Architectural Journals

奥山研究室 16M50607 支 小咪 (ZHI, Xiaomi)

1. 序

第二次世界大戦後に独自の発展を遂げた日本の建築は、海外メディアで取り上げられ、世界の建築に少なからず影響を与えてきた。そうしたメディアの編集方針や情報の扱い方は、日本建築の国際的評価における重要な側面であり、そこから海外メディアが日本建築とそれを内包する日本文化を、如何なる価値をもって取り上げたかを読み取ることができる。そこで本研究では、欧米の主要な建築誌^{註1)}に掲載された日本建築及び日本に関連する内容が含まれる記事に着目し、それらの構成と題材の分析及び通時的考察を通して、戦後の海外での日本建築に対する評価の変遷を捉えることを目的とする。

2. 日本関連記事の構成と題材の変遷

2-1. 記事の種類と特集の形式 日本に関する内容は図1の分析例に示すように、ニュースや批評、作品の解説といった様々な記事（以下、日本関連記事）に取り上げられている。まず雑誌の構成から、主要なトピックを扱う部分を『主要部』、その他部分を『非主要部』と大別し、表2のようにそれぞれの日本関連記事を[作品紹介][評論][論文]と[ニュース][イベント・書評][レビュー]に分類した。次に記事構成の形式を、日本関連記事のあるテーマの特集に組まれる特集形式と、単一の記事で構成される単独形式に分類した。さらに、特集形式において、美術館、

集合住宅といった一般的なテーマを〈一般特集〉、日本に関する内容のみが組まれるのを〈日本特集〉と定義した。

2-2. 題材の内容 次に、作品や思想といった各記事における日本と関連する内容を題材として抽出した。抽出した題材を、建築家の設計した建築や都市計画を扱う〔建築作品〕、建築と関連した芸術や文化、社会などの幅広い内容を扱う〔建築関連〕と建築家・デザイナーなどの〔人物〕の3つに分類した（表2）。

2-3. 記事の種類と構成の形式の変遷 ここで前節で検討した日本関連記事の種類と構成の形式の変遷を図2の上段、題材の内容の変遷を同下段にまとめた。まず記事の種類と構成の形式についてみると、50'Sと80'Sでは『主要部』の記事数は全体の7割以上占めており、他の時代では『主要部』・『非主要部』が主に半数にみられた。『主要部』において80'Sから、徐々に[評論]への形式の偏りがみられ、特に00'S以降に[評論]の数大きく増加していることが分かった。また、表4が示すように、本人が著した[論文]に関し、年代毎に2回以上^{註2)}掲載された建築家の人数は80'Sに一番多く見られ、その時代に日本人建築家の思想や考え方への関心も高まったと考えられる。次に日本関連記事の特集形式の変遷に着目すると、50'S、60'Sと80'Sにおいて〈日本特集〉の記事も一番多くみられるものの、90'S以降その数が大きく減少したことから、日

表1 分析対象

記号	専門誌名	国	頻度	創刊	分析対象	対象数/総数
RV	The Architectural Review	UK	月刊	1896	1955.1-2018.6	360/758
AD	Architectural Design	UK	隔月刊	1930	1950.1-2018.6	456/722
RC	Architectural Record	USA	月刊	1891	1950.1-2018.6	197/339
AA	L'Architecture d'Aujourd'hui	FR	隔月刊	1930	1955.1-2018.6	143/522
DO	Domus	ITA	月刊	1928	1955.1-2018.6	402/882

表2 記事の種類

主要部	作品紹介 評論 論文	図面や写真、解説文による建築作品紹介 第三者が調査・執筆した記事/批評 作品に付随する設計者による解説/論述
非主要部	ニュース イベント・書評 レビュー	建築に関する最新の情報や出来事の紹介 イベントおよび新刊紹介 建築や状況に関する短い評論

表3 題材の内容の分類

建築作品 (2352)	建築 建物-[2235] ・日本建築(総称)-[49] ・伝統建築-[30] ・公共建築-[891] ・住宅-[355] ・集合住宅-[31] ・プロジェクト-[190]	都市 都-[149] ・ランドスケープ-[66] ・都市計画-[40] ・土木・構築物-[11] ・インテリア-[157] ・理論&思想-[88]
	建築家 建人-[344] ・日本人建築家-[257] ・外国人建築家-[8] ・受賞者-[64] ・建築家の死亡-[15]	その他の人物 他人-[27] ・デザイナー &アーティスト ・小説家-[27]
	景観 景-[20] ・都市景観-[17] ・自然風景-[3] 技術 技-[37] ・材料&素材-[12] ・構法&構造-[25] 社会・文化 社-[316] ・社会背景・事情-[266] ・風土と文化-[30] ・災害と復興-[20]	デザイン・アート デ-[435] ・伝統芸術&芸能-[11] ・家具-[141] ・プロダクト-[183] ・絵画&書道&写真-[41] ・彫刻&装置-[59] イベント・出版 イ-[515] ・展示会・講演会-[261] ・コンペ-[68] ・本・雑誌-[186]

RV-9810		2章 記事の構成と題材の内容					3章 日本のタームの意味内容		
「Architectural Review」 No.1220 / 1998年10月号		非主要部 ①	タイトル	Japanese Slant	記事種類	イベント	/		
			記事の内容	Exhibition at Tokyo Great Museum of Contemporary Art	特集の内容	Metal			
			タイトル	Metal Turnings	記事種類	評論	一般特集	日本的タームの有無	
			題材の内容	Public lavatories & Park-keeper's flat in Hyogo	題材の種類	建築作品	公共建築	言及あり	
METAL Metal: between metal and craftsmanship VIEW Shuhei Endo's penchant for using curved sheets of corrugated metal to enclose space has surfaced again in the form of a structure containing public lavatories and park-keeper's flat in a small park in the mountains of Hyogo Prefecture. ①The tradition of creating playful structures as a part of garden design goes back to ancient times. [...] This small public building in a Japanese park ②transforms utilitarian purpose into an abstract piece of sculpture poetic in form and substance. [...] His structure is intended to be an abstract play upon this opposition.		非主要部 ②	記事の要約 Shuhei Endo's penchant for using curved sheets of corrugated metal to enclose space has surfaced again in the form of a structure containing public lavatories and park-keeper's flat in a small park in the mountains of Hyogo Prefecture. ①The tradition of creating playful structures as a part of garden design goes back to ancient times. [...] This small public building in a Japanese park ②transforms utilitarian purpose into an abstract piece of sculpture poetic in form and substance. [...] His structure is intended to be an abstract play upon this opposition.					伝統的側面 ① Traditional garden ▼ Traditional motif & Thinking イメージの投影	
PLACE From a simple and elegant and colorful play. (PETER DORTCHER) ARCHITECTURE Endo's recent work, Metal, Hyogo, City, 1998, is a small public building in a Japanese park. ②transforms utilitarian purpose into an abstract piece of sculpture poetic in form and substance. [...] His structure is intended to be an abstract play upon this opposition.		主要部 ③						建築的側面 ② Poetic form ▼ Simple & Pure 空間の質	
DELIGHT Endo's recent work, Metal, Hyogo, City, 1998, is a small public building in a Japanese park. ②transforms utilitarian purpose into an abstract piece of sculpture poetic in form and substance. [...] His structure is intended to be an abstract play upon this opposition.		主要部 ④							
COVER Shuhei Endo, City of Hyogo, 1998, is a small public building in a Japanese park. ②transforms utilitarian purpose into an abstract piece of sculpture poetic in form and substance. [...] His structure is intended to be an abstract play upon this opposition.			Shuhei Endo						

図1 分析例

本建築に対する見方が一般化されてきたと考えられる。

2-4. 題材の内容の変遷 次に題材の内容の変遷についてみると、総じて『主要部』において〔建築作品〕が一番多く占めることに対し、『非主要部』では〔建築関連〕・〔人物〕の割合が60'Sから80'Sにかけて大きく増加しており、その後も〔建築作品〕より大きな割合を占めている。

2-5. 建築作品における掲載状況の変遷 ここで〔建築作品〕について、掲載数を年代毎にまとめたのが表5である。『主要部』・『非主要部』にかかわらず、公共建築は90年代の『非主要部』を除き各年代を通じて一番多くみられた。住宅の掲載数に着目すると、『主要部』において50'Sから70'Sまで公共建築の掲載数に比べ約1/4しか占めていないものの、80'Sから10'Sにかけては掲載量が大幅に増え、公共建築の掲載数の半分以上にみられた。また、80年以降、プロジェクトやインテリアといった他の種類の作品の掲載量も増え、幅広い範囲で日本建築作品が取り上げられていることが分かった。

3. 日本的タームの意味内容

本章では、『主要部』において第三者による〔作品紹介〕と〔評論〕に着目し、その内容から海外において日本建築のどのような側面が取り上げられているかについて検

討する。図1の分析例を見ると、「日本庭園」や「純粋な形」のように、具体的に日本建築のどのような事柄について着目しているかを読み取ることができる。ここでは、記事のタイトルと要約においてみられる日本に関する内容を日本的タームとし、その内容を図3にまとめた。まず日本的タームは着目された事柄により、《建築的側面》《都市的側面》《文化的側面》（以下、《建築》《都市》《文化》）という具体的な水準と、時代的文脈を問題にしている『伝統的側面』^{註3)}『現代的側面』（以下、『伝統』『現代』）という水準をもつものとして捉えられた。さらに、意味内容の相互に関連する17の意味内容のまとまり分類した。そのうち、【両義性】【文化】は『伝統』・『現代』を横断し、【環境】【混沌】【メタポリズム】では《建築》・《都市》を横断する。さらに【精神性】は『伝統』・『現代』《建築》・《文化》を横断し、【イメージの投影】では『伝統』・『現代』《建築》・《都市》を横断しており、これらは幅広い側面をもつまとまりとして捉えられる。

4. 日本的タームの意味内容の変遷

本章では、以上で検討した日本的タームの意味内容を通時的に考察することで、戦後日本建築の国際的評価の変容を明らかにすることを目的とする。

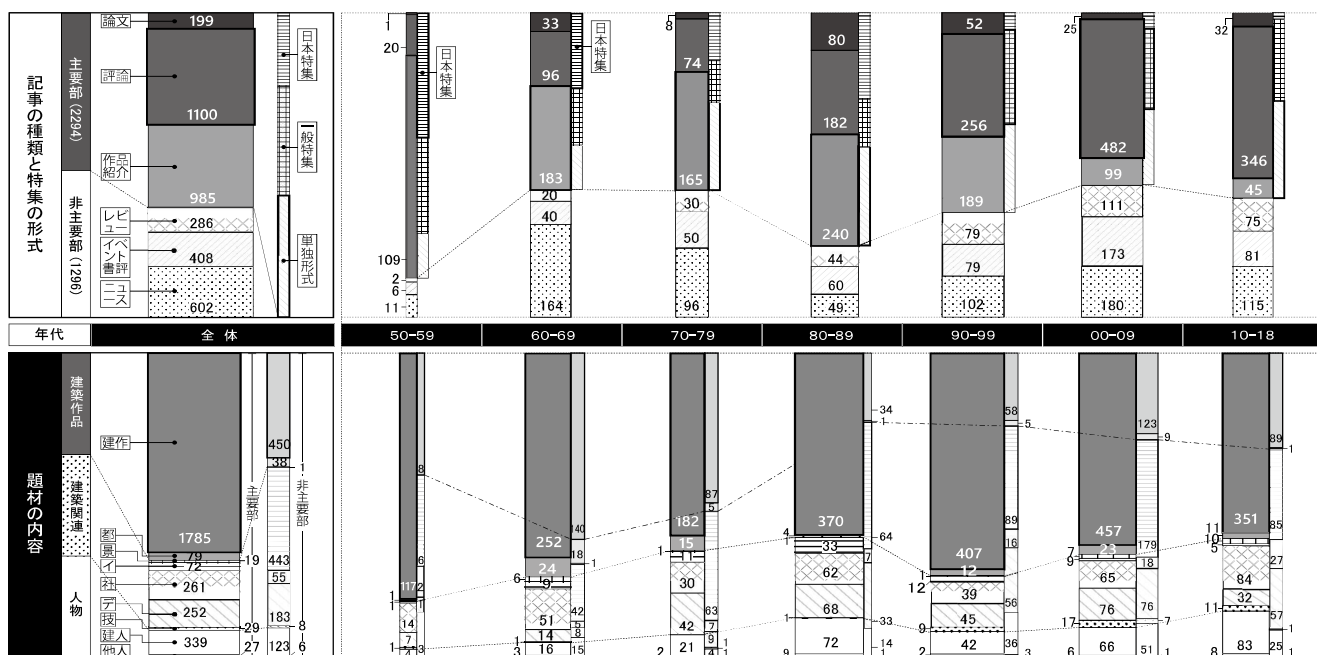


図2 記事の種類・特集の形式及び題材の内容とそれらの変遷

表4 建築家別論文の掲載状況とその変遷

順位	全体	50'S	60'S	70'S	80'S	90'S	00'S	10'S
安藤 [19]	丹下 [1] *	丹下 [7]	丹下 [2]	伊東 [4]	伊東 [5]	伊東 [5]	安藤 [4]	
伊東 [18]		黒川 [3]		藤原 [4]	磯崎 [3]	黒川 [2]	伊東 [4]	
黒川 [12]		芦原 [2]		藤井 [4]	安藤 [3]	藤原 [2]	SANAA [3]	
丹下 [11]				相田 [3]	長谷川 [3]	藤森 [2]	石上 [3]	
磯崎 [11]				長谷川 [3]	八束 [2]		藤本 [2]	
藤原 [8]				横 [2]	岸 [2]			
長谷川 [6]				安藤 [2]				
SANAA [5]				石山 [2]				
				倉俣 [2]				

表5 建築作品の掲載状況とその変遷

年代	全体	50'S	60'S	70'S	80'S	90'S	00'S	10'S
全体	49	3	11	4	16	8	7	6
全伝	24	9	8	3	1	2	1	5
公	89	69	166	107	136	191	222	172
住	355	24	32	19	85	73	123	23
建	31	6	2	0	9	8	5	1
集	190	2	22	17	47	77	25	27
プ	157	3	2	19	52	30	51	15
イ	88	1	9	13	24	18	23	42
理	45	1	5	11	3	9	16	8
ラ	7	0	1	0	0	2	4	2
構	27	0	18	4	1	1	3	1
都								
市								

4-1. 日本的タームの有無とその数の推移 ここで、日本的タームの有無と、『伝統』・『現代』においてまとまりごとのターム数及び《建築》・《都市》・《文化》の割合の変遷を図4にまとめた。まず日本的タームの言及がみられない割合は割合が70'Sから80'Sにかけて大きく減少しており、その後も全体の3割り前後を占めている。次に、言及ありの場合『現代』の総数が『伝統』の約2倍の数を示しており、60'Sまで『現代』が『伝統』より多いものの、70'S以降では『伝統』の数が『現代』の数と逆転している。さらに詳しく見ると、『現代』において80'Sと00'Sでは、前の時代に比べ大きく増加しており、10'Sでは再びに減少していることが分かった。一方『伝統』では、70年代で極端に減少していたが、全体として『現代』ほど大きな変化は見られなかった。以上のことから、海外において日本の伝統的価値を認めながら、70'Sから00'Sにかけて日本建築における現代的価値も評価されるようになり、一方10'S以降では、日本建築に対する見方が一般化される傾向があるといえる。

4-2. 《建築》《都市》《文化》の割合の推移 次に、各年代ごとの《建築》《都市》《文化》の割合について検討する。ここで、『伝統』・『現代』にかかわらず《建築》のほうが圧倒的多いため、《都市》と《文化》の変化に着目すると、『伝統』において全体の割合が通時的に大きな変化が見られないことに対し、『現代』では60'Sと80'Sにおいて、《都市》の数は前の時代に比べ大きく増加する特徴的な傾向がみられた。その背景には、60'Sではメタボリストが都市計画を中心にその理念が多く紹介され、80'Sでは日本の都市問題を扱った記事が増えたためだと考えられる。

4-3. 伝統的側面における意味内容の変遷 次に、図4の上段における『伝統』の内容の変遷に着目すると、上位の4位においては《都市》がみられなかったが、60'Sを除き、各年代ごとに《文化》が入っていることが分かった。さらにその内訳を見ると、若干順位の変化があるものの、60'Sから10'Sにかけて上位においては大体【イメージの投影】【精神性】【両義性】【思想】この四つのまとまりである。特に【イメージの投影】の"Traditonal motif"では『現代』の数が増える中、80'Sから10'Sにかけ最も多くみられた。これらのまとまりはいずれも日本人の感性や日本伝統の空間概念が投影される意味をもつことから、その評価の根底にはエクゾティシズムがみられる。

4-4. 現代的側面における意味内容の変遷 次に、図4の下段における『現代』の内容の変遷に着目し、上位

の6位においては各年代に《都市》の内容がみられ、そのうち60'S、80'Sと90'Sでは《都市》が3つ入っている。また、50'S、60'Sと10'Sでは上位に《文化》がみられ、特に10'Sに関しては東日本大震災などの日本の社会問題に対する関心が高まったためだと考えられる。詳しく見ると、『伝統』に対し『現代』の上位に入るまとまりの種類と順位が時代の変化に伴い大きく変化していることが分かった。まず『伝統』と同じように、常に上位に入るまとまりとして【精神性】と【イメージの投影】が挙げられる。"Minimal living"や"Genius loci"、"Artificial nature"について内容が多くみられ、『現代』においても日本人特有の自然観や都市観への関心が高いといえる。

一方【空間の質】【技術】【環境】【人間性】では、いずれも70'S以降に数が急増し、上位に入ったまとまりである。そのうち、【空間の質】では70'Sから10'Sにかけ最も多くみられ、そのうち"Light & Shadows"、"Transparency"、"Simple & Pure"などの内容が多くみられた。また【技術】の増加には70'S以降日本建築における高い構造技術力についての紹介が増えたためだと考えられる。さらに【環境】【人間性】では、両方とも人間が密接した生活環境と関わっており、"Harmonious with environment"、"Links the user and outside"が示すように、80'Sから10'Sにかけて、日本人建築家の都市環境及び人間活動との関係性を考慮した設計姿勢は高く評価される傾向がみられる。

また、【メタボリズム】【混沌】【状況】といった時代の背景と特徴を反映するまとまりも時々上位に入ったことがみられる。"Metabolic planning"、"Chaos"、"Earthquakes & Reconstruction"が示したように、日本建築に対するの評価は時代背景に大きく影響されることが分かった。

5. 結

以上、本論では、海外の建築誌における日本関連記事の構成と題材の分析及び通時的考察をし、さらに日本的タームの意味内容と合わせて検討することで、日本建築の海外での評価を経年的に把握した。その結果、時代の変化を伴わず一定の『伝統』から、技術や環境、そして空間の質を代表とする『現代』へ、戦後日本建築の国際的評価の移りかわりを捉えることができた。

註1) 研究対象となる建築誌を選ぶの主な基準として、歴史が長く且つ記事は英語で書くことであり、そのデータをまとめたのは表1である。

註2) 50年代論文掲載回数は丹下健三の一回のみのため、ここで集計対象にした。

註3) この《伝統》では本当の伝統建築や古い風習だけでなく、モダニズムが相対化されたと考えられる伝統の意味も含まれている。

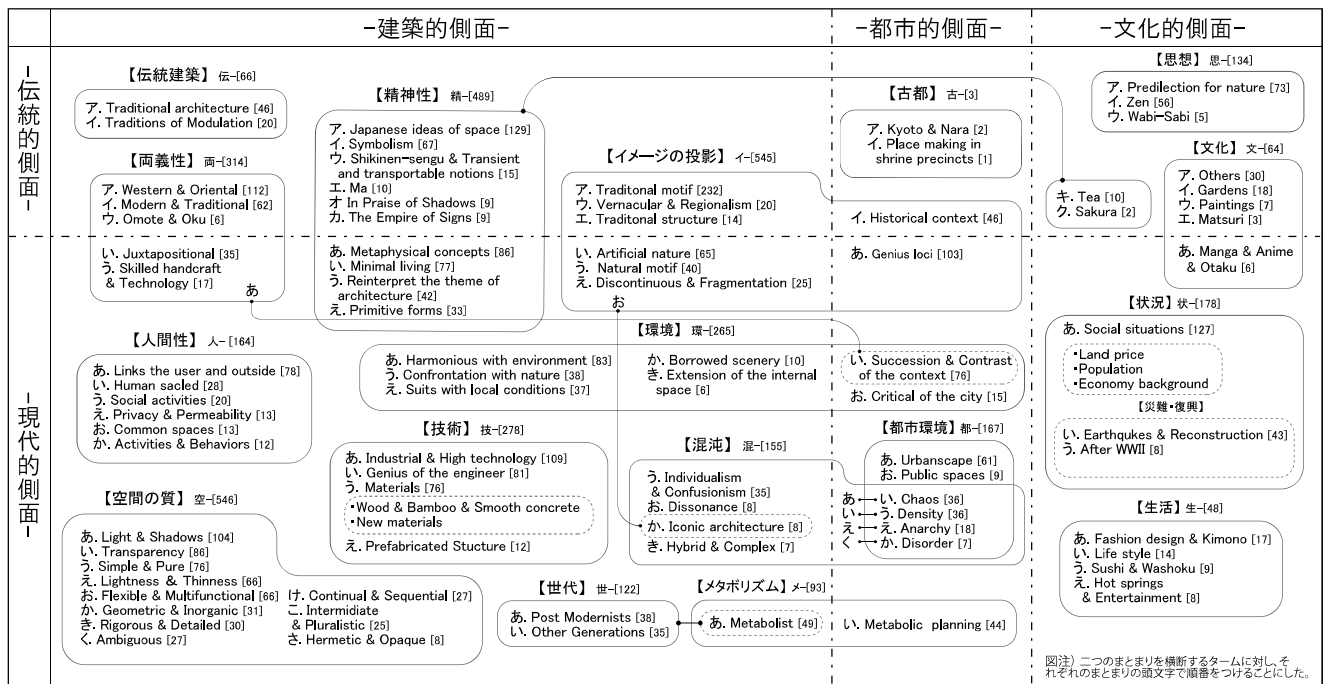


図3 日本のタームの意味内容

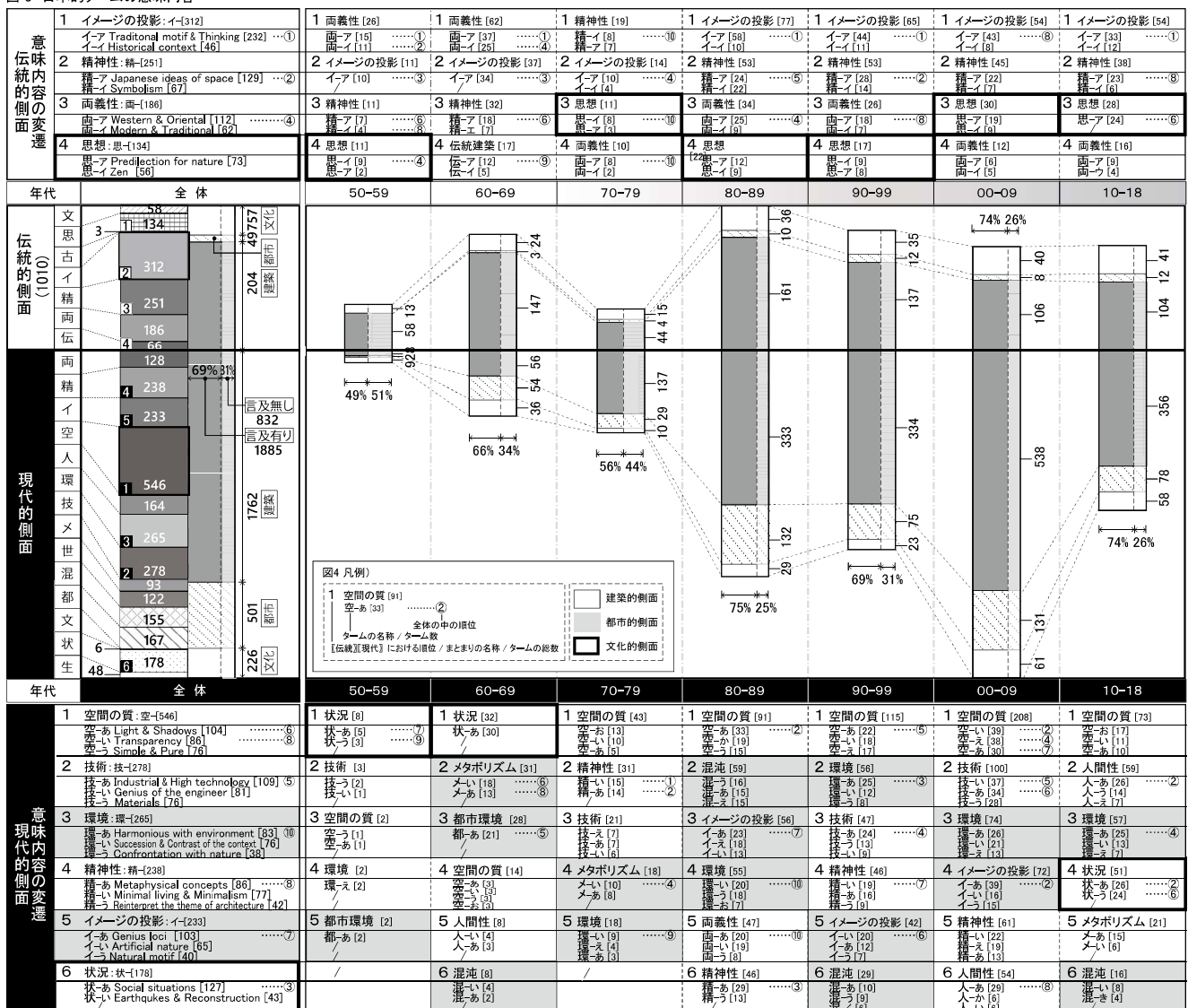


図4 日本のタームの意味内容の変遷